

## インフルエンザ脳症

### 【インフルエンザの合併症「脳症」】

インフルエンザの主な合併症は、肺炎や中耳炎ですが、まれなものに「脳症」があります。ウイルスは直接脳には入りませんが、全身の過剰な免疫反応により、脳がはれて脳症が起こります。毎年1,000万人もの人がインフルエンザにかかりますが、このうち脳症を発症する人は100人～300人です。新型も加わり、インフルエンザの患者が増えると、脳症の患者も増えてくるかもしれません。

乳幼児に多く、発熱から24時間以内に多く発症します。「けいれん」や「意識障害」「持続する異常言動」が主な症状です。治療法も改善されてはいますが、それでも約15％は死亡し、約25％は手足のまひやけいれんなどの後遺症が残ります。

### 【早期発見のポイント】

①けいれんでは、手足がピクピクしたり、こわばったりするほかに、一点を見つめたまま動かなくなり、白目になるなど多くは目の異常を伴います。発熱時には、大人と同じように悪寒がして手足が震えるなどしますが、意識がはっきりしない場合は注意が必要です。②意識障害では、話しかけても応答がない、つねるなどしても目を開けないなど、反応がなくなります。③小児では、インフルエンザに限らず高熱時に幻覚が見えたり、変なことを話したりしますが、通常は数分で治まります。異常な言動が続くときは、脳症が疑われるので、注意が必要です。

これらの症状が見られたときには、直ちに医療機関を受診しましょう。ほかのウイルスでも脳症になることがありますので、同様に注意してください。

（このコラムは市立病院 病院総務課 電話（260）0111が担当しています。）